

## 平成30年度 第1回大和市文化芸術振興審議会 会議要旨

---

1. 日 時 平成30年7月12日(木) 午前10時～正午
2. 場 所 大和市文化創造拠点シリウス2階 会議室
3. 出席状況 委員9名(深澤会長、小林委員、古谷田委員、鈴木委員、高橋委員、橋本委員、服部委員、伏見委員、吉川委員)  
事務局5名(文化スポーツ部長、ほか文化振興課4名)
4. 傍聴人 なし
5. 議 題
  - 1 開 会
  - 2 報告事項
    - (1) 文化芸術に関するアンケート調査について
    - (2) 平成29年度やまと芸術文化ホールの運営状況について
  - 3 報告および意見交換  
文化芸術振興基本計画[第2期]の振り返り
  - 4 その他
  - 5 閉 会
6. 会議資料
  - 文化芸術に関する市民アンケート調査回答まとめ
  - やまと芸術文化ホールの運営状況について
  - 大和市文化芸術振興基本計画[第2期] 実績評価

---

### 【会議要旨】

- 1 開会
- 2 報告事項
  - (1) 文化芸術に関するアンケート調査について
    - 市から「文化芸術に関する市民アンケート調査回答まとめ」説明。
    - 意見交換
      - 委 員：情報発信は大事だと思うが、行政が一方的に行う情報発信には限界がある。あらゆる媒体に情報を掲載していても、そもそも興味がなければその情報は目に留まらない。
      - 委 員：情報を行き届かせるための様々な工夫は必要かもしれないが、情報発信にあたっては、市民を発信者として受け入れ、取り込む姿勢を持つなど、市民の主体性を促す取り組みも必要ではないか。
      - 委 員：子どもに関する施策も同様で、市として伝統文化を始めとする様々な文化芸術に触れる機会を提供していると思うが、アンケート等では子どもへの文化芸術施策を要望する意見が多い。文化芸術に対するニーズが日々変化、多様化していく中で、要望に応じて後追いし、振り回されるのではなく、市として全体の文化芸術を総合的に考えた基盤となるものをしっかり保って欲しい。
    - 事 務 局：情報発信の点については、ご指摘のとおり、こちらが情報発信していたとしても、そもそも興味がなければ素通りされてしまうということは実感している。

- 事務局：芸術文化ホールで実施している来場者アンケートで、来場のきっかけとして最も多いのは「家族・友人・知人の紹介」という結果も出ている。今後の情報発信の在り方については、人と人との交流に着目し、市民が主体的に文化芸術の情報発信をできる環境を醸成することも考える必要があるかもしれない。
- 委員：我々も事業などを行う際に、近隣へポスティングを行うが、思うような成果は得られない。市の事業も広報やまよや地区の掲示板などを使って一生懸命周知しているが、「情報が少ない」というのは、文化芸術に対する意識がまだまだ足りていないということであり、もっと文化芸術を自身や地域の関心事として議論を深めていかななくてはいけない。文化芸術の裾野を広げていくためには、興味を持つきっかけがないとなかなか難しいだろう。
- 会長：きっかけづくりの仕掛けとして具体的なイメージはあるか。
- 委員：例えば子どもに関する施策で言えば、やはり保育園や幼稚園、学校などの教育機関との連携が必要だろう。子どもたちに何かを体験させようとしても、教員等による引率の際に事故等があれば責任を取らなければならないことから、なかなか外に出られないというのが現状だということを伺ったことがある。
- 委員：芸術文化ホールという立派な施設が開館したので、大和に住む子どもたちにはぜひ活用してもらいたいと思う。そのためにも教育機関へ積極的に働きかけを行い、連携を深めていかなければいけない。
- 委員：例えば、災害時には避難指示等の警戒情報が多く出されるが、自らの身の危険に関する情報でさえも、自身の問題として捉えられず、情報を逃してしまうという事態が起こっているようである。
- 委員：自らの住んでいる地域の情報が滞りなく伝達されるためには、情報を受け取る側が関心を持つなどの意識醸成が大切である。例えば、主体的に情報を発信できる市民リーダーを発掘、育成し、その数を増やすことで、文化芸術をはじめ様々な情報が隅々まで行き渡らせる仕組みができると良い。
- 会長：情報発信が地域コミュニティの結束につながるという視点があると良い。
- 委員：市民の主体性を尊重することは大切であるが、市民に丸投げをするようなことはあってはいけない。市としての考え方や方向性などの核となる部分をきちんと示し、それらに基づいた市民の活動等に対し、適切な支援を行う仕組みは必要である。
- 事務局：市民の関心という話で言えば、総合計画に関する市民意識調査の中で、行政に関わるあらゆる分野の中から関心のある分野を選ぶ設問があり、防犯や交通安全、福祉といった自分たちの生活に身近な分野については、当然関心度も高くなる傾向にある。一方で文化芸術に対する関心度はかなり低い結果が出ており、同時に満足度も低い順位となっている。
- 事務局：このような状況から、文化芸術の関心度を高めていくためには、文化芸術の振興を施策の中心に据えつつ、あらゆる分野との連携を深め、生活の身近なところで文化芸術に触れる機会を充実させていく必要があると考えている。
- 事務局：また、市民リーダーの発掘、育成については、文化芸術をサポートする人材を育成する施策を、文化芸術振興基本計画[第1期]から取り組む課題として掲載をしている。しかし、その実施にあたっては、その役割や具体的な活動内容をきちんと整理しなければならず、未だ着手できていないのが現状である。これまでの情報発信に係る市民の役割は、取り組むべき課題として引き続き検討

をしていきたい。

委員：文化芸術の担い手を増やしていく姿勢は大切だろう。

事務局：子どもたちへのきっかけづくりについてだが、美術鑑賞や演劇鑑賞など学校教育の中で文化芸術が取り入れられる機会が増えているものの、今の時代、子どもの興味を惹くものは数多くある。その中で、文化芸術の分野から、好きだと思えるものを提供することによって子どもが興味を持つきっかけとなれば良いと思うし、この芸術文化ホールがそういう機会を提供する場となれば良い。

事務局：現在の文化芸術振興基本計画[第2期]では、芸術文化ホールが開館する前であったが、次の第3期計画では、芸術文化ホールをどのように活用していくかという視点が、一つの重要なポイントになると思う。

委員：芸術文化ホールという文化の拠点の完成し、文化芸術の振興という面では大いに発展があったものと思われる。今後も更なる進展に期待をしているが、一方で、まちの賑わいや産業活性などの周辺環境の整備が追いついていないように感じている。例えば、芸術文化ホール周辺の食文化の発展は、ホールに来た家族連れなどの市民が楽しむことができ、豊かな文化芸術の環境づくりにとても大切な要因の一つになるだろう。

## (2) 平成29年度やまと芸術文化ホールの運営状況について

○市から「やまと芸術文化ホールの運営状況について」説明。

○意見交換

委員：ギャラリーの稼働率が他の施設に比べて上がっていない。ギャラリーを利用する際は全面利用か半面利用のいずれかを選ぶようになっており、展示会場の広さとして中途半端になってしまうことがある。もう少し柔軟な利用設定ができると利用しやすくなるのではないか。

事務局：芸術文化ホールのギャラリーは公共施設としては市内で一番広い展示スペースを保有しており、展示作品のジャンルや利用する団体の規模によっては広すぎるという意見も少なくはない。そういう理由で、半面利用をされる団体も多いが、かえって窮屈な展示になってしまうこともある。

事務局：実際に利用する際は指定管理者が窓口となって、利用に関する相談を受け付けているが、その際にどちらの利用が適しているかなどのアドバイスなども適宜行っている。今後、そのような要望が増える様であれば、全面、半面以外の利用方法について指定管理者と話し合いをしても良いかもしれない。

会長：全面利用と半面利用で料金が変わるのか。

事務局：半面利用の際は全面利用時の半額の金額となる。展示の際は可動パネルを使用して多様な会場の利用は可能なので、柔軟な対応があっても良いかもしれない。

会長：多様な運用に期待する。

委員：利用団体の市内、市外の割合はどのようになっているのか。市内団体の育成という観点から、市内の団体を中心に多く使っていただくことが重要であるが、ホールの運営面でいうと、市外からの利用が増えなければ稼働率が上がらないので、そのバランスを注視していく必要がある。

事務局：市内団体の利用が多いが、市外からの利用も多い。具体的な割合は今後お示しするようにする。

## 3 報告および意見交換

文化芸術振興基本計画[第2期]の振り返り

○市から「大和市文化芸術振興基本計画[第2期] 実績評価」説明。

○意見交換

- 委員：大和市は外国籍市民が多く、国際色が豊かなまちと言える。しかし、具体的な文化芸術の事業として挙げられているのは、姉妹都市との文化芸術交流くらいである。姉妹都市との文化交流は国際交流において重要な事業ではあるが、もっと日常の中で国際交流を促す文化芸術の取り組みができると良い。
- 事務局：ご指摘のとおり、大和市には70ヶ国以上の国や地域にルーツを持つ外国籍市民が生活している。今年4月には旧図書館、生涯学習センターの移転跡地に「市民活動拠点ベテルギウス」を整備し、大和市国際化協会の事務所を移転した。施設内には外国籍市民をはじめ、あらゆる方が気軽に集える国際交流サロンを設置し、平日でも多くの方が訪れ、賑わいを見せている。
- 事務局：具体的な事業としては、姉妹都市との交流として青少年団の派遣を毎年相互に行っているほか、毎年開催している日本語スピーチ大会では、小中学生からの参加があるなど、比較的若い世代にとっては外国の文化に触れる機会や環境が多いかもしれない。
- 事務局：国際交流の分野においては、日常のあらゆる場面で多文化共生への理解を図る取り組みを進めているが、文化芸術事業としての実績は一定程度に留まっているのが現状である。事務局としても必要な取り組みであることは承知をしているので、具体的な事業として強化していきたい。
- 委員：先ほどのアンケート結果などからもわかるように、文化芸術に関する国際交流の分野は若い世代の関心が高いことが伺える。恐らく、先ほど紹介のあった取り組みなどから、若い世代にとっては自分たちの身近な問題として捉えているものと思われる。今後、この分野においては若い世代に注目し、上手に投げかけることで文化芸術への参加を促す良いきっかけになるのではないかと。若い世代がリーダーとして牽引することにより、将来的にあらゆる分野、世代へつながることも期待できる。
- 委員：イベントでは子どもが参加すると、それに伴って親族が見に来られる。若い世代が動くことによってあらゆる世代に影響を与えることはあると思うので、若い世代が中心となって市との協働意識を持って事業を行えると良い。
- 会長：若い世代への期待は大いにあるが、前提として若い世代が地域に根差すための仕掛けを考えていかななくてはならない。
- 委員：魅力がキーワードだと思う。シリウスの図書館には連日多くの若い世代が集まっている。それはこの施設にそれだけの魅力があるからであり、これからは地域においても若い世代を惹きつける魅力あるまちづくりが必要になるだろう。
- 委員：小さい頃の成功体験や達成感などの経験は成長の過程において非常に重要である。文化芸術においても、小さい頃にそのような経験をしていれば、将来文化芸術の継承者やリーダーとして活躍する人材が増えることも考えられる。そのような視点から、これからのイベントにおいては「体験型」や「参加型」というのがポイントになると思われる。
- 委員：若い世代の文化芸術に対する捉え方が変わってきているように感じる。写真の分野で言えば、昔から写真はカメラで撮影する物という考え方が当然であるが、若い世代にとって写真といえばスマートフォンで撮影し、SNSで共有するものの

イメージが強い。

委員：そうすると同じ写真という分野にありながら、従来の活動者と若い世代の間に溝ができ、文化が途切れてしまう。流行の情報をできる範囲で取り入れ、選択肢を増やすことで若い世代が参加しやすくなるだろう。

委員：我々の活動では参加する子どもが増えてきている。参加者が多くなると、上の年代の子どもを見習い、お互いに切磋琢磨することで発表の質も高くなり、レベルの高い舞台に参加することもできるようになる。

委員：また、国際的な観点からも、子どもへの応援の仕方一つとっても、国によって大分異なるということを現場で感じる。意見の収集にあたっては現場の声を広く受けることができれば計画の策定に大いに参考になるだろう。

#### 4 その他

- ・市より委員の任期について説明。

現委員の任期が平成30年8月1日まで。

次期委員の任期は平成30年8月2日から平成32年8月1日まで。

- ・市より次回の審議会日程について説明。

8月下旬に開催するよう調整する。

※調整の結果、8月29日（水）10時から開催することとなった。

#### 5 閉会